「みんな違う」のは「みんな同じ」

岐阜市立岐阜清流中学校　３年　樅　山　　葵

　私はわがままだ。身勝手だ。そう思った。障がいのない人を羨ましいと思った。障がいがありながらも強く生きている人を羨ましいと思った。

　そう思ってしまうのは、私の障がい故だろう。私には生まれつき、視覚障がいがある。弱視や色覚異常などである。視力は眼鏡をかけてもほとんど矯正されず０．１程度。そして色の判別が苦手である。そのため、学校日常生活では、私にとって難しいこと、苦手なことがどうしても出てくる。そんなとき、私の障がいは見た目では分からないし、自分から自分のことや助けてほしいことを伝えなければならない。それは私にとって、とても怖いことで、涙がこみ上げそうになって、言葉に詰まることがよくある。そんな中で、私は「普通にみんなと同じだったらよかったのにな。」と思った。こんな風に苦しい思いをしなくていいなら、楽だろうな、と。しかしその反面、障がいがありながらも、強く、懸命に生きている人をテレビやネットなどで目にすると、「いや私とは違うし。」などと思ってしまった。とても身勝手だ。自分を受け入れられず、人に対して自分の都合の良いように解釈していた。知ろうとせず、勝手に「楽だろう。」「違うから。」という思い込みの偏見の目で見ていた。

　そんな私の考えを変えるきっかけになったのは、「自分を受け入れる」ことだった。発端はある日、同級生から言われた言葉。

「え、やば。」

「普通分かるやろ。」

私は、ペンの色の判別に困ったため、同級生にこれは何色かと尋ねたら返ってきた言葉。とても苦しかった。悲しかった。でもその時私は何も言い返せなかった。「いや、私は色の判別がちょっと苦手なんだ。」とか言えたのに。とても後悔した。そこで私は自分のことを知ってもらわなければと思った。この思いを担任の先生に打ち明けたとき、その先生は私の障がいのことを、私の「特性」と言ってくれた。そのとき、私は気持ちが軽くなったような、すっとしたような感じを覚えている。これらをもとに私は同じ学年の大勢の前で、自分の口から自分のこと、思いを伝えることにした。自分を人に受け入れてもらおうとするには、まず、私が「自分を受け入れる」ことが大切だった。私の障がいとは、私の一つの特性なんだ、と。そして、学年の大勢の前で自分のことを伝えた。すると他の人が私のことを知ろうとしたり、気遣ってくれることが増えたと思う。また、私は自分を受け入れ、勇気を出し、行動したことは大きな一歩になった。そして私も自分を知ってもらうばかりではなく、いろんな人のことを知ろうと思えるようになった。

　私は、自分を受け入れ、他の人に伝えていくことにした。それは、さまざまな人の間で飛び交う偏見、差別を減らしていくためである。私が、自分の障がいのことや考えを誰かに伝えることで、その誰かの視点や考えを変えたり、知識として知ってもらうことができる。その考えや何かが変わった人の行動や言葉かけで救われる人がきっといる。そういうちょっとした連鎖によって少しずつ少しずつ変わっていく。

　私は、先生から障がいのことを「特性」といってもらえて、考えが変わり、自分の人に対する偏見的な考えを自覚し、「自分を受け入れる」ように考えを変えた。そういった小さな積み重なりだと思う。自分は障がいがあって大変な思いをすることもあるけれど、人それぞれみんなが、それぞれの思いや経験をもっている。そういう人と異なる部分というものは誰もがもっている。見方を変えれば、人との違いをもっているという点は、「みんな同じ」ということである。だからこそ、人それぞれ違うということを受け入れ、その人を知り、理解していくことが大切だと思う。こうした考えが増え、誰もが自分らしく生きる権利を行使できれば、障がいがあっても、なくても、みんなが生きやすい社会になっていくはずだ。

　そのために私はこれからも、「自分を受け入れていく。」その上で、自分にもできること、自分にしかできないことを探し、行動し続けていく。